

国内経済情勢

概 観

生産、出荷は前月減少のあと、6月には再び大幅な増加を示した。月々のふれをならしてみると、生産の増勢には変わりがないが、出荷の伸びは生産ほどではない。最終需要については、賃金所得の大幅増加を背景に個人消費が堅調が続いているほか、設備投資の動きも機械受注は減少しているものの当面はなお底堅いようにうかがわれる。

商品市況は総じてみれば落着きぎみに推移しているが、一部には季節的要因や市況対策もあって下げ止まりないし小反発を示すものもみられ、これを映じて卸売物価は6月に下落のあと7月にはいつてからは保合いとなっている。

金融面では、企業の資金需要は引き続きおう盛であり、一方都市銀行などは資金面の制約もあって融資抑制態度を維持しているため、決算資金の流出に伴う手元流動性の低下もあって、企業の資金繰り繁忙感が続いている。

6月の国際収支は、貿易収支が大幅の黒字が続けているものの、長期資本収支が引き続きかなりの流出超を示したため、総合収支では小幅の黒字にとどまった。

生産は高水準を持続

鉱工業生産(季節調整済み)は、5月に前月比-0.3%と微減のあと、6月(速報)は+3.3%の大幅増加となった。これには、不規則変動の大きい産業機械、重電機の著増や石油化学の新設備の稼働本格化、モデル・チェンジ後の乗用車の生産持

直しなどがかなり響いており、財別には一般資本財、耐久消費財の増加が目だっているが、その他の財も軒並みに増加した。この結果、4~6月の生産の前期比伸び率は+4.8%と1~3月(+3.2%)を上回り、3ヵ月移動平均値の前月比でも、3月+1.9%、4月+1.0%、5月+1.8%と依然高水準を続けている。

一方、6月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、4月-2.5%、5月-0.6%と続落のあと、前月比+4.6%の著増を示した。これは船舶の引渡し集中によるところが大きい(船舶を除けば+2.9%)、財別には非耐久消費財を除き各財とも増加している。もっとも4~6月を通じてみると、出荷は1~3月大幅伸長(+5.3%)のあと前期比+1.4%の増加にとどまり、3ヵ月移動平均値の前月比でも3月+0.7%、4月+0.2%、5月+0.5%と生産に比べて伸び率が低い。

この間、6月の鉱工業製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比+1.1%(前月+1.9%)と引き続き増加したが、上記出荷の著伸から製品在庫率指数(92.9、船舶を除けば93.4)は前月(それぞれ96.2、95.2)を下回った。

設備投資と関連の深い一般資本財出荷(季節調整済み)は、6月(速報)には+5.8%の増加(前月+0.4%)となった。一方、先行指標である機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)は、6月には電力、鉄鋼、化学等の著減から前月比-23.2%の大幅減少(前月-2.5%)を示し、4~6月でも前期比-2.9%(1~3月+16.4%)となった。また6月の建設工事受注額(民需、季節調整済み、速報)は前月比-2.3%の減少(前月-3.4%)となったが、4~6月では前期比+6.5%(1~3月+6.6

%)の伸びとなっている。

この間、労働力需給は引き締まり状態を続けており(6月の有効求人倍率1.42倍)、現金給与支給額(全産業、1人平均)も6月は高額賞与の支給などから前年同月比+18.4%の高い伸び(前月+17.1%)を示した。

こうした賃金所得の増大を背景に、個人消費は引き続き堅調に推移しているものとみられ、全国百貨店売上高は、5月に前年同月比+23.3%の高い伸びを示したあと、6月(速報)も+20.4%と高水準を続けた。

卸売物価は6月下旬のあと保合い

最近の商品市況をみると、非鉄金属が続落したほか、合成繊維、洋紙、鋼板類等引き続き弱含みの商品が多い。これには、資金面の制約などから商社、ユーザーが当用買い態度を続けていることのほか、海外市況の軟調(非鉄金属)、輸出成約の伸び悩み(鋼板類、合成繊維)、新設備の稼働に伴う供給力増加(電気銅、紙、合成繊維)などが響いているものとみられる。

もっとも、天然繊維、スフ糸、人絹糸等は高値を続けており、また条鋼類、木材等は梅雨明け後の需要回復、夏期減産といった季節的事情や市況対策の実施を背景に下げ止まりないし反発を示している。

6月の卸売物価は、食料品、金属製品、機械器具等が上昇したものの、鉄鋼、非鉄金属が続落したほか、繊維品、木材・同製品も値下がりしたため、総平均では前月比-0.4%の下落となった。7月にはいつてからは、非鉄金属が続落した反面、鉄鋼は反発し、総平均では上、中旬とも前旬比保合いとなっている。

一方、消費者物価(東京)は、5月前月比-1.1%、6月-0.5%のあと、7月(速報)は食料、住居費、被服の値上がりから+0.3%の反騰となり、季節商品を除いても+0.2%(前月+0.1%)と引き

続き上昇した。

企業の資金需要は引き続きおう盛

7月の金融市場では、銀行券が84億円の還収超(前年同263億円)となった一方、財政資金は税収の好伸を主因に3,763億円の大増収(前年同2,493億円)となったため、月中の資金不足は多額に上ったが、本行は債券の買入れのほか貸出により調整を図った。この間、コール・レートは季節的な大幅資金不足期にはいったため、7月1日以降一律0.25%上昇し、市場は通月堅調裡に推移した。

銀行券の月中平均発行残高の前年同月比増加率は5月+19.3%のあと、6月は曜日構成の関係、天候不順、賞与支払時期の遅れなどもあって+18.5%とやや伸び率が低下したが、7月は+19.0%となり、依然高水準を続けている。一方、預金通貨(月末残高)の前年同期比伸び率は、決算資金の流出に伴う企業の手元流動性の低下などを映じ6月にはかなり低下(+18.6%)したが、4~6月平均では+20.4%と1~3月平均(+19.8%)をやや上回った。なお、手形交換高との対比でみた預金通貨の回転率(季節調整済み)も6月にはかなり上昇したが、4~6月平均ではほぼ1~3月平均並みの水準となっている。

6月の全国銀行貸出は、月中5,720億円増と前年同月比+7.0%の増加にとどまり、月末残高の前年比伸び率も+16.3%(4月+16.5%、5月+16.4%)と前月に引き続きわずかながら低下した。月中貸出増加額を業態別にみると、都市銀行は決算関係資金需要の増高にもかかわらず前年比+11.9%の増加(3,474億円増)にとどまり、地方銀行も5月に大幅増加のあと当月は前年を下回ったが(1,485億円増、前年同月比-8.8%)、長期信用銀行は設備資金需要の高水準持続からかなりの増加(565億円増、同+17.2%)となった。

一方、中小企業金融機関では、月末休日の関係による前月著増の反動から、相互銀行が前年を相

当下降った(562億円増、同-29.4%)ほか、信用金庫も増加率が低下(1,032億円増、同+14.4%)した。

企業の資金需要は、根強い設備・運転需資に回収条件悪化に伴うつなぎ資金や在庫資金も加わって引き続きおう盛である。これに対し都市銀行などは資金面の制約もあり引き続き抑制態度を維持しており、決算資金等の流出に伴う手元流動性の取りくずしもあって企業の資金繰り繁忙感が続いている。

6月の全国銀行貸出約定平均金利は、長期貸出金利や輸出関係貸出金利の引上げが続いているほか、短期貸出金利についても若干利上げの動きがみられ、月中の上昇幅は0.014%(前月同0.011%)とこのところやや上昇が目だっている。

この間、公社債市況は、5月から6月にかけて軟調に推移したが、6月中旬以降は企業の手持ち債券売却が一巡した一方、農林系統金融機関等の買入れがふえているため強含みに転じている。なお、株式市況は5月末を底値に反発し、6月中旬にかけて戻り足をたどったが、その後は再び見送り気分が強まり、一進一退を続けている。

6月の国際収支は小幅の黒字

6月の国際収支は、貿易収支が335百万ドルの黒字(前月同200百万ドル)となったものの、長期資本収支が延払信用供与の増加や外人証券投資の流出超などから引き続きかなりの赤字(171百万ドル、前月同189百万ドル)を示し、総合収支では48百万ドルの小幅黒字(前月赤字78百万ドル)にとどまった。この間、金融勘定では、為替銀行の対外短期ポジションは本行の輸入資金貸付実施に伴う円シフトなどから76百万ドルの改善を示し、一方外貨準備は、イタリアのIMFに対する債権

の肩代わりなどもあって月中132百万ドルの減少となった。なお、7月も外貨準備は前月とほぼ同様の事情から月中261百万ドル減少し、月末残高は3,508百万ドルとなった。

6月の貿易収支を季節調整後でみると、輸入が5月減少のあと前月比+7.8%(前月-2.6%)の大幅増加となったものの、輸出も同様に前月比+6.0%(前月-1.2%)の伸びを示したため、月中の黒字幅は322百万ドルとほぼ前月(同324百万ドル)並みの水準となった。

6月の輸出は、前年同月比でも+23.0%と前月の伸び(+18.3%)を上回ったが、これは船舶の引渡し集中による面が大きく(船舶を除く通関ベース4月+20.7%、5月+18.0%、6月+20.8%)、その他の品目では、鉄鋼、自動車等が高水準を続けた反面、化学肥料、テレビ等は低調であった。なお、先行指標である輸出信用状接受額は、6月に前年同月比+20.5%のあと、7月は+17.4%となった。

一方、6月の輸入は前年同月比+30.8%(前月+25.4%)とかなりの増加を示したが、これには非鉄金属鉱などの前月からの入着ずれ込みも響いているものとみられる。6月の輸入承認額は前年同月比+25.8%(前月+27.5%)となった。

なお、1～6月中の国際収支をみると、貿易収支はほぼ前年同期(黒字1,473百万ドル)並みの1,442百万ドルの黒字となったものの、長期資本収支が前年とは様変わり的大幅流出超(919百万ドル、前年同期流入超129百万ドル)となったことを主因に、総合収支では黒字7百万ドルと前年同期(同915百万ドル)に比し黒字幅が大きく縮小し、ほぼ収支とんとんとなった。

(昭和45年8月4日)